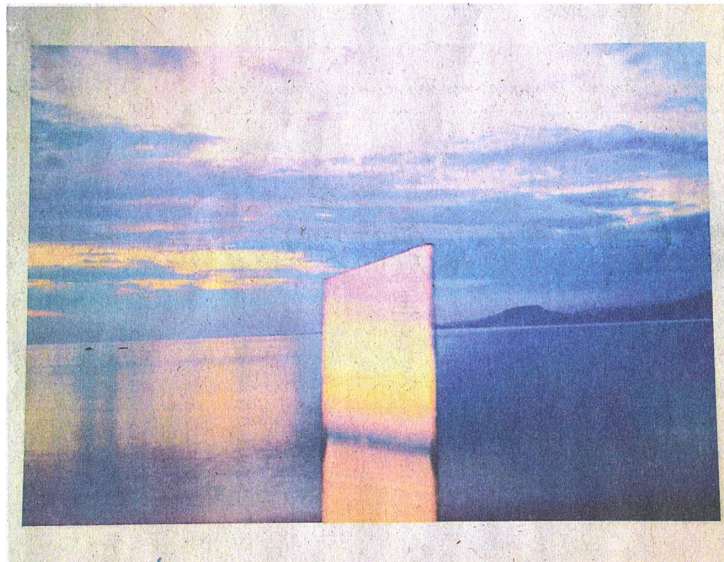


写真の「真」とは何かを追求

崇城大大学院生 福山 大夢さん(23)＝益城町



鏡を使って現実離れした世界を撮影した福山さんの作品



夕闇の穏やかな海に、輝く縦長の壁が立っている。現実離れた世界のように見えるが、実際の風景を撮った写真だ。縦長の壁に見えるのは、つるした鏡に映った周りの

景色。「本当なのか、うそなのか考えさせる写真を撮りたい」と言う。写真を本格的に始めたのは、崇城大芸術学部デザイン学科の4年生から。2016年の熊本地震がきっかけだった。被害の大きかった益城町に住み、失って分かる日常の大切さに気付いた。「本当に大切なことは埋もれている」。鑑賞者の感覚

に訴える表現を目指して、写真を選んだ。

白色の背景に、同系色の石こう像を置いて撮った卒業制作は、背景と像のあやふやな境界を表現。写真家の登竜門の一つとされる「富士フィルムフォトコンテスト」の特別テーマ部門で優秀賞に選ばれた。「人とは違う写真。こういう路線を認めてくれて自信になった」

崇城大大学院の修士2年生。一眼レフやコンパクトデジカメ、スマートフォンなど、機材によって写真に写る像の違いにも興味がある。写真の「真」とは何か。大学院博士課程の進学を目指しており、さらに追求する。

(中原功一朗)

※鏡を使った福山さんの写真は、県立美術館本館で開かれる崇城大芸術学部の卒業・修了作品展(2月19～24日)で展示予定。